



ていたのは、交流とは学問的な知識や情報の交換のみを目的としたものではなく、人的交流と、そこで培われたネットワーク、そして友情が大きな財産であるということであった。その後の総合討論では今後の展望と課題について意見が交わされた。韓国側からは、日中韓の三か国を巻き込んだ東アジア規模での交流事業の実施など、国立機関という強みも活かしたダイナミックな展望が語られたのが印象的であった。また、これまでの考古学分野の交流のほか、保存科学や建築分野など、考古



日韓交流20周年記念国際学術大会

学以外の分野も含めた交流拡大や、テーマをある程度絞った継続的な共同研究事業をおこなっての報告書や論文集の刊行、共同展示などの形で成果発表をすることが、今後の交流の持続につながるかと述べた。さらに、予算的な問題等から縮小傾向にある派遣期間の確実な維持、交流に関わる体制の一貫性の確保が必要であると締めくくった。

翌二日は、檀考研と文化遺産研究院共催の「韓日交流二〇周年記念国際学術大会」であり、冒頭、林鍾惠院長が開会の辞を述べ、青柳所長が挨拶に立った。そして両機関から各三名が登壇した。いずれも最近の交換研修に参加した面々であり、自身が研修の中で取り組んだ研究内容について発表した。研修の成果を問われる場として若干のプレッシャーも感じつつ、発表に臨んだ。

重見係長は、新羅の王都である月城から出土した多量の新羅土器の一括資料を対象として、土器編年に関する問題、王宮関連施設で長期保存された食器としての特殊性を論じた。岩越は装飾付須恵器と韓国の燈蓋形土器を中心とした、日本の須恵器と韓国三国時代の複数の国、地域の土器の関係性について発表した。

西浦は日韓土器の比較研究に取り組み、韓半島南部の無文土器と日本列島の弥生土器を対象に、土器製作と土器移動の比較を試みた。交換研修をおこなっていた当時の写真や資料なども振り返りながら、この学術大会の発表資料としてまとめることで、今後、分析を重ねた上で、研究成果を日韓の研究者に伝わる論文として形にしたいと強く感じた。

韓国側は、蔣企明・鄭仁部・李志映の三氏であり、日韓の王墓の比較分析、韓国昌寧の古墳群からみた日韓交流、日韓土器窯の比較など、いずれも緻密かつ、やはり日本の古墳時代や、国家形成の舞台としての近畿地方、そして奈良県への関心の高さがうかがえる内容であった。

多岐に及ぶテーマであったが、討論では、かつて檀考研に研修で滞在し、日本考古学にも関心が深い李柱憲氏の司会により、議論が交わされた。二つの学術大会は、木下亘共同研究員のほか、韓国の研究者を中心に多くの参加者を得て、盛会に終わった。また、大会の様子はYouTubeにアップロードされ、各講演は大会と同名の予稿集にまとめられるとともに、そのPDFデータが国立文化遺産研究院のHPで公開されている。

後日談として、学術大会から約一か月後の二月二日〜二四日に文化遺産研究院から林院長、趙研究企画課長らが来日し、先の学術大会の参加機関である奈文研、檀考研、福岡県を順に訪問された。院長は、学術大会に参加した面々と再会できたことで、旧友に会えたかのような感覚であると同時に、より実感を伴って両機関の交流関係を知ることができたことと述べ、双方向で交流関係をおこなう意義を強調された。まさに先の学術大会が両機関にとって今後の交流を更に進展させる良いきっかけとなったといえる。

### 三. おわりに

金浦国際空港に到着した一一月一〇日、ソウルの気温は一二度と、日本よりも七度ほど低く、肌寒さを感じた。しかし、かつて派遣期間中にお世話になった方々との再会を果たすと、その寒さもすぐに忘れ、心は自然と温まっていた。

一日の学術大会後の夕食会では、青柳所長が韓国側の用意したワインになぞらえ、これまで積み重ねられてきた日韓の研究交流が、長い歴史をもつフランスのワインのように、さらに深みを増していくことを

願う言葉を述べられた。それは、本大会の趣旨を象徴するものであったように思われる。日本の歴史を考えるうえで、隣国である韓国との比較研究や交流史を踏まえることの必要性は、改めて言うまでもない。時に難しい局面も抱える二一世紀の東アジア情勢の中で、それらに左右されることなく実直で学術的な「人と人」の交流関係を紡ぎ続けることも、我々所員の重要な使命と考える。

今回の学術大会を通じて強く印象に残ったのは、これまでの研究交流の背後に、長年にわたり人的ネットワークを築き上げてきた先人たちの努力があり、現在もなお、より良い交流の在り方を模索し続けている最中であるという事実であった。筆者らも、かつて派遣を経験した立場であると同時に、今後の日韓交流を担う世代の一人でもある。今回の学術大会を節目として自覚を新たに、先人たちが紡いできた交流の歴史を受け継ぎながら、次の時代につなげる新たな「日韓交流史」を築いていきたいと考えている。

## 大韓民国における研修記

### 黒澤ひかり

#### 一. はじめに

大韓民国国立文化遺産研究院と檀原考古学研究所（以下檀考研）の交流事業は、令和五年度に二〇周年を迎えた。この間、コロナウイルス感染症の世界的流行による一時的な中断を挟みつつも、多くの研究交流が継続的におこなわれ、両国の文化財研究の深化と相互理解の促進に大きな成果をあげてきた。その歩みは、筆者にとっても先達の足跡をたどり、自身の研究を見つめ直す契機となっ

ている。

令和六・七年度の交流事業における派遣人員の選定は書類選考という形式で実施された。希望する研究テーマ、その目的や計画などが審査の対象となり、古墳・飛鳥時代の研究を志してきた筆者もまた、この機会に強い関心を抱いた。所内に掲示された応募要項を目にしたとき、迷いはあったものの、海外での調査研究へのひそかな憧れを捨て切ることはできなかった。結果として所定の選

考を経て、韓国での研修の機会を手にする事となった。本稿は令和七年一月一七日から五月三〇日にかけての研修報告である。

#### 二. 国立文化遺産研究院での研修

令和七年一月一七日から三月三十一日までの期間は、国立文化遺産研究院（以下研究院）において研修を実施した。研究院は韓国中西部の大田広域市に位置する。大田は一九九三年に国際博覧会が開催された都市でもあり、政府系および民間の研究機関が集中する学術都市として知られている。到着した時には、その都市の規模と整備の行き届いた街並みに強い印象を受けた。受入先である研究院の考古研究室では、チェ・ソンイ先生に主な研修の担当者として、滞在中の生活面から資料調査に至るまで、きめ細やかな支援をしていた。

スンも手配してくださり、毎週月曜日の午前中は韓国語レッスンを受講することとなった。

また、忠南大学のウ・ジェビョン先生のご厚意により、忠南大学校百済研究所への出入りをお許しいただき、大田滞在中にこの研究所でも研究や学習ができることになった。

韓国語のレッスンを行う場所が忠南大学の正門近隣だったため、月曜日は午前中に韓国語の授業を受け、午後は百済研究所に行き、研究活動をおこなうこととなった。百済研究所では二人の助手の先生方にご協力いただき、論文や報告書などの資料収集を支援していただいた。特に、研修中の大きな試練であった韓国語による研究発表の際には、発表前に長時間にわたり練習に付き合ってくださり、心強い支えとなった。

研修にあたっては、日本出発前に調査を希望する資料や訪問したい遺跡や展示施設・研究機関のリストを提出していたため、それに基づいて日程を調整していただき、できる限り資料や展示施設等を見学できるようにご配慮いただいた。加えて、ボランティアの方による韓国語のレッ

火曜日から金曜日は研究院への出勤や資料調査を中心に過ごした。研究院の図書室を利用して、研究に関する情報収集や、考古研究室以外の先生方との交流の機会を得ることができた。どの先生も気さくに接してくださり、食事や週末の小旅行に誘っていたことも多かった。特に、研究会画課のチェ・ジョン先生やハン・ジンソン先生など日本語に堪能な

先生方のご尽力によって、様々な活動に参加することが可能となり、さらには、日本の文化に関する発表の機会も設けていただいた。

日常の多くは考古研究室の先生方が交代で時間を割いてくださり、各地での資料調査や遺跡・展示施設の見学に連れて行ってくださった。とくに、各地に設置されている国立

文化遺産研究所による遺跡発掘の様子を間近で見学できたことは貴重な経験であった。羅州文化遺産研究所による馬山里古墳群・伏岩里古墳群の発掘調査、慶州文化遺産研究所によるチョクセム古墳群・金尺里古墳群の発掘調査を見学する機会を得た。

今回の研修では、韓半島の三国時代と日本の古墳時代における墳墓の埋葬儀礼の比較研究を、自身の主要な研究課題の一つとして据えていた。そのため、埋葬施設の構造、副葬品の種類と構成、さらにその変遷を調査するとともに、実際の出土資料を直接観察し、日本国内の資料との比較に資する所見を得ることを目指した。しかし、時間的な制約もあり、今回は副葬品のうち韓半島における鉄製農具の種類構成と変遷に焦点を絞り、遺物の実見調査をおこなうこととした。研究院の方々の多大なご

支援を受け、百済・加耶地域を中心とする出土遺物を実際に観察する貴重な機会を得ることができた。

また、研究テーマに関わる重要な遺跡の見学などに沢山の時間を割いた。韓国での生活にも次第に慣れ、

一人で公共交通機関を利用できるようになると、研究院の方たちと行く見学だけではなく、できる限り多くの遺跡や資料を見たいと考えるようになった。そのため、連休や週末などを利用して、自主的に遺跡や展示施設を見学する時間を設けた。結果として、展示施設は三〇か所以上、韓国内の主要遺跡五〇か所以上をこの期間に見学することができた。大田は交通の便が非常に良く、どこへ行くにもアクセスが容易であったことも幸いした。

また、韓国に日本人の研究者が来る際には資料調査のお誘いを受ける機会もあり、研究院の許可を得て同行させていただいた。京都府立大学の諫早直人教授を代表とする飛鳥時代舍利荘厳具の比較研究に関する調査に同行した際には、王興寺出土の舍利容器をはじめ、大通寺および公山城の出土品を見学することができた。これらの調査に帯同させていただき、目にするのできた資料や

経験は、いずれも筆者にとって計り知れない幸運であり、海外で研究を進める上での大きな糧となった。

### 三、国立扶余文化遺産研究所での研修

前述のとおり、大田での研修期間には多くの方々のご尽力に支えられ、充実した日々を過ごすことができた。研修後半は扶余に移り、発掘調査を中心とした新たな研修生活が始まった。調整をしてくださったのは、令和七年度に檀考研に研修で来られたナム・ホヒョン先生である。筆者が扶余に到着してからナム先生が日本に向かわれるまでの一週間、参加する現場や宿舍の手配、ビザの手続きなどを、同じく担当のキム・ナヒョン先生とともにご尽力くださった。宿舍は研究所の敷地内にある寮であり、非常に安心して生活することができた。扶余は百済時代の遺跡が数多く存在し、大田と比べるとのどかな雰囲気か漂っていた。季節は大田で過ごした冬から春へと移り、過ごしやすいく気候になっていた。

扶余文化遺産研究所は、国立文化遺産研究所の中でも慶州文化遺産研究所に次ぐ規模を誇る。調査対象は主に百済の熊津期・泗泚期の遺跡で、



公州王陵園での発掘調査（左が筆者）

筆者の研修期間中は、公州市の王陵園、扶余郡の扶蘇山城、益山市の王宮里遺跡など、各地に点在する百済関連遺跡の調査がおこなわれていた。それぞれの現場を見学し、当初は扶蘇山城チームに合流する予定であったが、せっかくの機会だからとご配慮いただいて研修期間の前半は公州市の王陵園の調査に、後半は扶蘇山城の調査に参加させていただくこととなった。

王陵園の調査はオ・ドンソン先生をチームリーダーとして、宋山里古墳群一〜四号墳を対象におこなわれていた。調査は墳丘周辺および石室内部で実施されていた。

墳丘周辺では、墳丘の規模や墓道



扶蘇山城チームとの遺跡踏査  
忠州塔坪里七層石塔の見学

に関する調査がなされており、正確な規模や構造などが明らかになりつつあった。石室内部では床面付近の掘削が進められており、搬出された土砂をその場でフルイにかけ、微細な遺物を回収する作業が丁寧に続けられていた。篩目の粗いものから細かいものへと使い分け、水洗しなから遺物を選び分けていくと、棺金具や装身具など被葬者に関連する遺物が想定以上に良好な状態で多数確認された。なかでも、被葬者のものとみられる歯の出土は予期していなかった成果であった。調査では通常立ち入ることのできない宋山里古墳群の石室内部も見学することができた。石室内は、盗掘を受け開口していた上に、二〇世紀代に調査の手が及んでいたものの、前述のように遺物が確認されたことや石室の構造などを現在の技術で記録することが試みられており、百濟墓制研究がこれまで

以上に進展することに期待ができる調査であった。

さらに出土した遺物はその場で速やかに整理され、写真撮影などの記録作業が着実に進められていた。帰国後、この調査成果は韓国の報道機関へ公表され、ニュースでも大きく取り上げられていた。成果の整理から公表までのこの迅速さには、強い印象を受けた。

扶蘇山城の調査に移ると、古墳調査とは異なり、検出・分層・掘削・実測など、通常の発掘調査と同様の作業が中心であった。筆者が現場に参加した時期は調査の終盤に差し掛かっており、主に遺構の掘削と実測作業を担当した。できる限り現場の力になりたい一心で、他の先生方とともに懸命に取り組んだ。扶蘇山城の発掘現場は、若い女性研究員で構成されたチームであったため、最初の緊張もすぐに解け、毎日楽しく発掘に参加させていただいた。

韓国では多数の山城が築かれているが、扶余邑内の山城は羅城の内外に計画的に配置され、都城防衛を担っていた。その中でも扶蘇山城は、王宮跡と推定される官北里遺跡に近接しており、王宮と一体となって整備された点で特に重要な山城である。

筆者が参加した第一七次調査は扶蘇山城全体の西側に位置し、朝鮮時代には軍倉地として利用されていた地点でおこなわれていた。同一調査面に百濟期から朝鮮時代に至る異なる時期の遺構が重層しており、調査は非常に慎重に進められていた。百濟期の遺構としては、瓦積基壇建物跡、柱列、貯蔵庫と考えられる堅穴などが確認された。さらに下層調査からは、百濟期に本来斜面であった地形を盛土によって平坦化し、その上に建物を計画的に配置していたことが明らかとなった。

筆者の帰国前日には現地説明会も開かれ、チームリーダーであるヤン・ギホン先生の解説に多くの参加者が耳を傾けていた。遺構の説明では、百濟期の瓦積基壇をもつ建物跡や平坦部を造成するための盛土などの工法を示す土層断面が注目を集めていた。現地の参加者の関心の高さを肌で感じるとともに、発掘が地域社会と密接に関わっていることを実感する貴重な機会となった。

#### 四 おわりに

今回の韓国での研修は、これまで文献や講義を通してしか接することのなかった韓国考古学に実際に触れ

研究現場の空気を肌で感じる貴重な機会となった。特に、発掘調査や資料見学の過程で目にした遺跡・遺物の数々は、これまでの自分の研究視野を大きく広げるものであった。また、現地の研究者や学生との交流を通じて、文化財の調査・研究に対する考え方の違いと共通点の双方を学ぶことができた。

冒頭に述べたように、樞考研と韓国の文化遺産研究院との交流が節目の年を迎えた。今後もこれまで紡いできた縁を継承し、さらに発展させていくことが求められる。大田および扶余での研修を通じ、日韓両国における調査・研究の連携の重要性を改めて実感した。文化財を通じて国際的な学術交流は、単に学問的成果を共有するだけでなく、相互理解を深める架け橋としての意義を有している。

本稿では詳述できなかったが、研修期間中、多くの方々から資料調査や遺跡踏査に際して多大なご配慮を賜った。今回得た経験と知見を糧に、今後は東アジアの古代社会の比較研究に一層真摯に取り組みことで、この貴重な機会を与えてくださった諸先生方と関係者のご厚情に報いることができれば幸いである。

# 檀原考古学研究所における研修報告

陳佳妮・崔夢鶴

## 一、はじめに

陝西省考古研究院と奈良県立檀原考古学研究所（以下、檀考研）との交流協定に基づき、二〇二五年八月一日から一〇月一四日までの二か月半にわたり、檀考研を中心とする機関において研修を実施した。本研修は文化財保存科学を主目的とし、実地調査及び技術交流を通じて、漆木器、繊維品、石造文化財、金属文化財など多様な材質の文化財の保存と展示活用について理解を深めた。さらに、奈良、京都、大阪、北海道、



研究交流会の様子

福岡、福島、宮城などの重要遺跡や文化財研究機関を訪問し、日本の文化財保護における体系的な取り組みを体感することができた。

## 二、研修概要

研修期間中、私たちは以下の三つの分野に焦点を当て、実践的な知見を深めた。

### (一) 文化財の保存と科学的研究

檀考研の保存科学センター並びに関連機関の保存科学実験室において、漆、木器、繊維品等を対象とした科



発掘現場での応急処置

学分析と保存処理について実践的に学んだ。

### ① 漆、木器類の文化財研修

日本で出土した漆や木器の保護における一連の技術体系について系統的に学んだ。発掘調査では、舟形木棺など新たに出土した文化財に対し、保湿処理を中心とした応急処置を発掘現場で実施し、文化財の乾燥による変形を防止している。実験室段階では、文化財の特性に応じて真空凍結乾燥法またはポリエチレングリコール含浸法を適用し、すべての強化試薬は厳格な適合性評価を経ている。研究面では、木材解剖学による樹種同定、顕微CT・ブルーライト3Dスキャン・多波長画像解析などの非破壊技術による内部構造と表面文様の抽出（国立アイヌ民族博物館のガマ製ござ仮想平坦化事例など）、蛍光X線分析・蛍光分光分析法による漆層成分の精密分析、人工加速劣化実験による劣化メカニズムの解明など、一連の分析手法が確立されている。最終的には3Dプリント技術を用いた文化財の仮想修復と複製、さらに特製展示支持具の製作により、「科学的認知↓保存介入↓展示活用」という一連の作業プロセスが構築されている。

### ② 繊維品類の文化財研修

檀考研、京都国立博物館、国立アイヌ民族博物館などにおいて、織物文化財の非破壊検査技術（顕微観察、繊維同定、染料分析など）を学んだ。X線CT、走査型電子顕微鏡、フーリエ変換赤外分光法、光ファイバ分光法などの先端技術を駆使し、文化財の内部積層構造、繊維劣化形態、染料化学組成を精密に解析し、保存処置の科学的根拠としている。また、複数回の研究交流を通じて、日本における古代織物保存の研究体系を系統的に理解した。

### ③ その他文化財と考古遺跡の研修

石造文化財の保護では、忍路環状列石、手宮洞窟などの視察を通じて、微生物病害に対する総合防除体系を深く学んだ。金属文化財では、BTAを用いた腐食抑制処理技術を重点的に習得した。

さらに、東北地方における古代製鉄滓の特徴、製鉄技術の発展経緯、高炉構造の変遷についても理解を深めた。また、脆弱な遺構全体の発泡ウレタン充填強化法による包括抽出、遺構に対する薬剤含浸強化技術など、複雑な考古遺跡の全体的な保存技術も学んだ。

## (二) 安全とリスク管理

日本の文化財保護では、法律・制度・資金・人材の整備に加え、「予防的保存」の理念が徹底されている。文化財の輸送、収蔵、保管、研究、展示、撤去に至る全ライフサイクルにおいて、多重防衛的なリスク管理マトリックスを構築している。輸送時には、3Dスキャンと3Dプリント技術により文化財に合わせた専用包装と支持体を設計し、振動・衝撃を効果的に緩衝する。環境制御では、収蔵前の精密殺菌から、展示室内の有害ガスモニタリングとその吸着、恒温恒湿収蔵庫とリアルタイム監視システムの設置まで、微生物及び劣化要因に対する能動的防御を実現している。特に、遺跡の現地保存や脆弱文化財については、温湿度と地下水位の動態監視、輪番制の「休養」ローテーション制度による精密管理が実施されており、印象的であった。さらに、建築構造の積層ゴム免震から展示ケース内の滑り止め緩衝材まで、地震に対する多層的な防衛体制が構築されている。国立民族学博物館などでの実践では、免震、環境モニタリング、微生物防除を一体化した緻密なシステム保護策が具現化されていた。

## (三) 価値の活性化と活用

日本の文化財活用の中核は、文化財を「静的な保存」から「動的な資源」へ転換し、学術研究を基礎とし、市民参加を核とし、科学技術と創造性を支えとする活性化体系を構築することにある。具体的には、①発掘現場説明会や学校向けカリキュラムによる青少年向け教育連携、②一乗谷朝倉氏遺跡、平城宮跡などでのAR技術や触覚モデルを用いた没入型体験の創出、③「式年造替」制度、「人間国宝」の技芸演示、「一村一品」運動などによる技術継承と地域産業振興、④文化ルートの構築や遺跡群の一括世界遺産登録による「全域博物館」理念の実践、⑤特別講座や市民体験プログラムを通じた参加型保護モデルの確立など、多角的な取り組みが展開されている。これらの施策によって、文化財保護と地域発展が相互に促進される持続可能なモデルを共同で構築している。

## 三、研修を終えて

檀考研に到着する前から、齊藤希さん、中尾梨子さんをはじめ、多くの皆さんに温かいお心遣いをいただきました。齊藤さんの流暢な中国語、北井さんの確かな運転、米川裕

治さんの詳細な地図など、現地生活への適応を大いに助けていただきました。

研修期間中、保存科学センターの奥山誠義さん、河崎衣美さん、中尾さんからは技術面で多くのご指導を賜りました。皆さんのご引率により、九州、中国、東北、北海道地方の多数の博物館と遺跡を見学し、日本全域における文化財保護の知恵と熱意を深く理解することができました。

また、休憩時間には皆さんより日本の文化や習慣についても教えていただき、大変勉強になりました。企画課の齊藤さん、高木清生さんには、奈良・京都周辺の遺跡をご案内いただき、古都の魅力を存分に味わうことができました。木村理恵さんをはじめとする学芸課の方々には展示撤去作業の流れをご指導いただきました。さらに、青柳正規所長、前園実

知雄先生、岡林孝作さんなど著名な学者の方々とも深く交流する機会に恵まれ、文化財事業への熱意とひたむきな姿勢に深く感銘を受けるとともに、今後の仕事への大きな励みとなりました。

特に印象的だったのは、川上洋一副所長にお招きいただいたお盆や月見の行事、中尾さんの休日を利用し

た一乗谷朝倉氏遺跡へのご案内、内藤元太さん、中尾さん、伊東菜々子さんとの語学学習、中村健太郎さんが空港の保安検査場まで見送ってくださったことなど、数々の心温まるおもてなしです。こうした体験を通じて、私たちは日本における「人と人との絆」の温かさを強く感じました。

また、奈良文化財研究所の楊萌先生、楊曼寧先生、国立アイヌ民族博物館の劉高力先生など、日本で活躍される中国人研究者の皆様からも、専門的な交流と生活面での細やかなご配慮をいただきました。

紙幅の都合上、お一人お一人に直接御礼を述べることは叶いませんが、本研修にご協力くださったすべての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。今回の研修は、単なる専門技術の相互学習ではなく、両国の文化財関係者相互の心の交流そのものでした。私たちが持ち帰ったのは知識だけでなく、文化財保護を「船」とし、人的交流を「糧」として、相互尊重と理解の航路で日中両国が並走し、より良き明日へ共に進むという、共通の責任とビジョンに違いありません。

## 研究集会・いのししの会

第三七八回研究集会在令和八年一月二日(月・祝)に研究所講堂にて、森岡秀人共同研究員が「大量埋納銅鐸における多段階説の提唱―淡路・松帆銅鐸研究の現在地―」と題して発表されました。さらに外部研究費に関わる研究発表(発表者:河崎衣美・内藤元太・谷川 遼)がおこなわれ、その後、いのししの会を榎原オークホテルにて開催しました。研究集会は八九名、いのししの会には八〇名の参加がありました。

〔公財〕ユネスコ・アジア文化センター 森本 晋、「奈良国立博物館」井上洋一、〔公財〕由良大和古代文化研究協会 泉森 皎、「友史会」田中吉満・松本和英・原口憲次郎・松崎加奈恵・安藤美津江、〔一財〕榎原考古文化財団 下尾茂敏・梅原章一・藤原三津子・大西寿江・森田 勝・青木明美、「報道関係者」柳澤伊佐男・古俣友理・皆木成実・関口和哉・沖 真次・篠崎義博・中田口章人・上村晴彦・今井邦彦・中村俊介・早川保夫・竹内義治、「文化財課」小池香津江・大西貴夫、「世界遺産室」森井順之、「なら歴史芸術文化村」平田千江子・藤元正太、「万葉



研究所玄関前での記念撮影

(着席者左から、右島和夫、篠崎義博、井上洋一、中井一夫、前園實知雄、青柳正規、森岡秀人、稲村達也、泉森 皎、西本昌弘、寺澤 薫)

文化館」辻 祥子・井上さやか・榎戸涉吾・染田英美子、「明日香村」森川裕一、「高取町」遠藤電峰、「特別指導研究員」前園實知雄・寺澤 薫・稲村達也・西本昌弘・今津節生・右島和夫・田中俊明・田中晋作・小澤毅、「共同研究員」中井一夫・山内紀嗣・泉 武・森岡秀人・梅咲直照・金原正明・宮原晋一・高田将志・入倉徳裕・卜部行弘・清水昭博・井上主税、「研究所員」青柳正規・田中裕之・川上洋一・光石鳴巳・鈴木裕明・岡林孝作・箕倉永子・小栗明彦・清水康二・北井利幸・水野敏典・奥山誠義・杉山拓己・河崎衣美・小倉頌子・吉村瑠美・青柳泰介・木村理恵・本村充保・東影 悠・岡見知紀・内藤元太・蓮井寛子・黒澤ひかり・谷川 遼・横山 舞・松尾樹志郎・伊東菜々子・北 将伍・米田敏幸・岡田憲一・鈴木一議・絹畠 歩・辰巳祐樹、「関係者」河内國平・石黒勝己(順不同、敬称略)

### アトリウム展示案内

研究所一階アトリウムで『再び輝き始めた藤ノ木古墳2』(パネル展示)を一月九日(金)から四月二十七日(月)まで開催中です。今回は修

理の理念や方法、令和六年度の経過と新知見を紹介しています。詳細はホームページなどで公開しています。

### 附属博物館展示案内

◎令和八年度 春季特別展

「葬る」

「弥生人は墓に何を託したか?」

会期:令和八年四月一八日(土)

～六月一四日(日)

弥生時代、日本列島では様々な墓が営まれました。その多様性には、当時の大きな社会変化が影響していると考えられています。本展覧会では、東アジア世界を臨み情報のフロンティアであった九州・山陰から、近畿までの墓制の紹介を通じて、変化の時代に生きた人々が墓にどんな意図を残したのか、何を表現しようとしたのかをさぐります。

研究講座(全三回) 一三時

第一回 四月二六日(日)

第二回 五月一七日(日)

第三回 六月七日(日)

列品解説会 各日とも一一時

四月二五日(土)

五月一六日(土)

六月一三日(土)